〔東京家政大学研究紀要　第21集(1), p. 13～18, 1981〕

こどものむし歯に関する調査

宮　崎　照　子・跡　見　一　子*

（昭和55年9月27日受理）

Investigation on decayed tooth in children.

Teruko MIYAZAKI and Kazuko ATOMI

(Received September 27, 1980)

緒　　言

近年，歯科界をはじめ，小児保健，学校保健，その他，地域の公衆衛生活動などの各分野で，子どものむし歯問題が非常に注目されるようになった．最近の子どものむし歯の特徴として，①発生時期が低年齢化されていること．②むし歯の罹患が急性で，広範囲に進行する重症のむし歯が増加していること．③都市部より農山村部にむし歯の発生が高い，などがあげられる．

子どものむし歯の発生の時期は，歯牙萠出後1～2年の間に大部分が発生している．わが国にみられるような子どものむし歯の低年齢期の罹患は，他の諸外国ではほとんど報告されていない．わが国独特の問題である点に注目したい．

特に2歳以上の子どものほとんど全員にむし歯があると推察されている．しかしこの原因については，蔗糖を中心とした糖分の多い食物と，口腔内細菌による歯垢の付着や歯質，歯の形態，唾液の量や性質などがあげられているが，食習慣，口腔清掃度による影響など，さまざまな因子がある．

そこでむし歯予防の立場から日常保育している子どもたちの生活とその環境を見直してみると，口腔の衛生，栄養摂取，とくに間食のとり方，日常の規則正しい生活，の3つにまとめられる．このことから実際に幼児の生活の実態を把握し，むし歯に対する保護者の関心と，むし歯予防についての生活態度の改善から，幼児のむし歯をできる限り少くすることを考え調査を実施することになった．

* 保育学第2研究室　** 小児医学研究室

調　査　方　法

目的：むし歯予防の啓蒙も含めて，子どもの食生活，食後の口腔清掃の実態，保護者のむし歯予防に対する認識などを把握することを目的とした．

対象：調査の地域を東京都と近県に選び，関心のある園に依頼した．その内訳は次の通りである．

A．東京都内幼稚園（板橋，港，江東区）	421世帯
B．東京都内保育所（板橋，新宿区）	328世帯
C．埼玉県下幼稚園（入間郡）	246世帯
D．埼玉県下保育所（入間郡，南埼玉郡）	391世帯
合　計	1,385世帯

方法：内外消費者問題研究所の行った調査を参考にして，1～6歳までの子どもを持つ家庭を対象として，アンケート用紙を作成し，昭和54年春から夏にかけて，幼稚園，保育所を経由して配布し，回収・集計した．
回収率は78.8%であった．

集計および分析：まず上記の，A，B，C，Dの4群に分けて単純集計をした．更に各項目ごとにむし歯の有る子どもと無い子どもについてクロス集計をし，その関連をみた．

結果および考察

調査項目は30項目よりなり，二次回答を求めたものもあるが，その結果は以下の通りである．

1.　むし歯罹患児率について

むし歯罹患児をみると，表1の通りで，近県の幼稚園が一番罹患率が高く，次いで都内の幼稚園，近県保育所の順で一番少いのは都内の保育所であった．中でも団地の保育所は55.2%であった．ただし幼稚園は3歳以上で，

表1 む し 歯 罹 患 児 率

対象		罹患児	実数	園別内訳	性別
		%		%	男児%
A	東京都内 幼稚園 3園	80.5	298人 370人	a. 80.3 b. 82.6 c. 77.8	49.1
B	東京都内 保育所 5園	67.5 (74.6)	171 253	d. 64.0 e. 72.0 f. 75.5 g. 77.2 h. 55.2	50.3
C	近 県 幼稚園	84.0	153 182	i. 84.0	50.3
D	近 県 保育所 5園	79.4 (81.1)	209 263	j. (4園計) 72.9 k. 84.2	47.8
計		60.4	803 1,329		48.6

・罹患児（ ）内は3歳以上
・人数の上段は むし歯罹患児数
　　下段は 回答者数

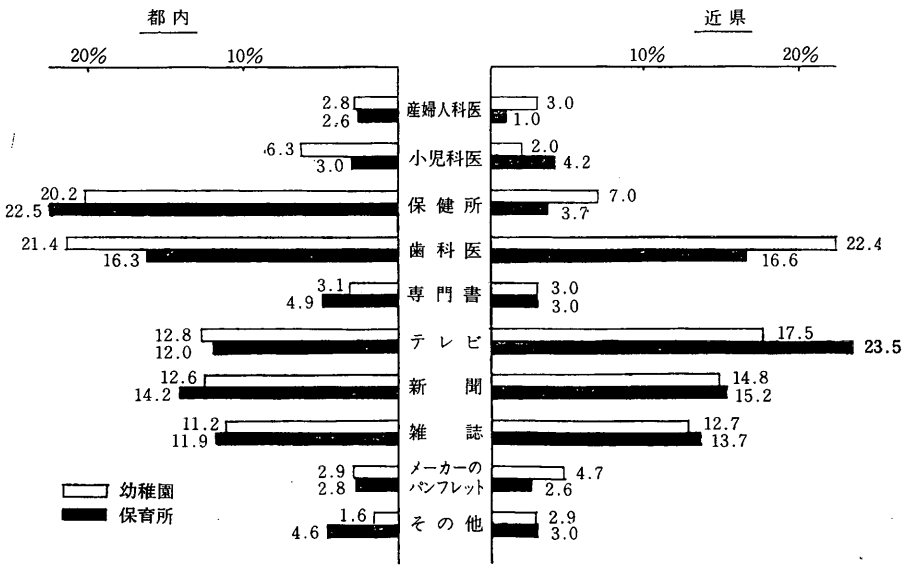

図1 むし歯予防の知識を何から得たか

保育所は0歳よりなので，全体の数で平均するとと60.4%となる．B群は0～2：11歳児が9名おり，D群には，0～2：11歳児が7名で，これらを除くと，B群 162/217人中＝74.6%，D群は202/249人中＝81.8%となり，幼稚園と同様に3歳以上で集計すると，B，D群ともに多く，性差はみられない．

2. **むし歯予防の知識は何から得たか，について**

これは図1の通りで歯科医，保健所，テレビなどの順位で，地域，施設の差はあまりなかった．

3. **妊娠中の栄養の摂取の注意について**

妊娠中，歯が作られる時期は妊娠の5～6週目からはじまり，乳児の生れる頃には，乳歯はほとんど出来ている．子どもの歯質のきまるのは妊娠中の母親の栄養のとり方による．妊娠中特に必要なのは蛋白質で，とくに動物性蛋白質が大事でその他カルシウム，リン，ビタミンA，C，Dも必要である．

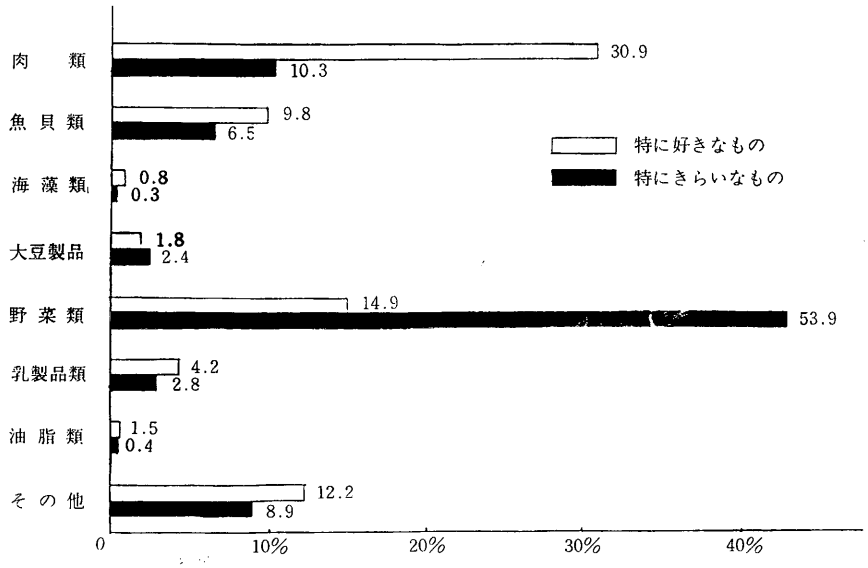

図2　子どもの食物の好き嫌い

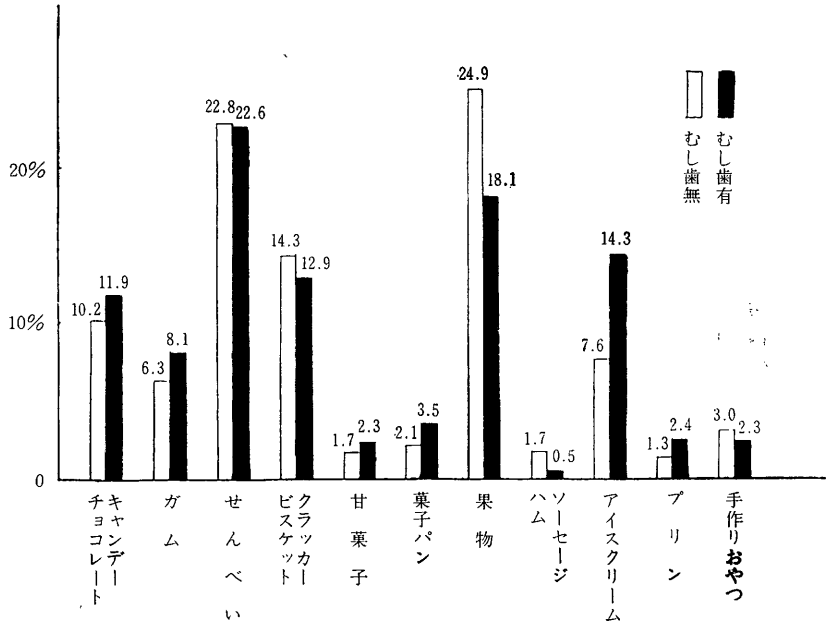

図3　子どもの間食の種類

むし歯のある子どもの母親をみると，妊娠中に栄養のとり方に気をつけなかった人が多くみられた．また，「気をつけて食べた食品は，魚貝類27.3%，乳製品23.5%，海藻類21.1%，野菜類，果物12.4%であり，つづいて大豆製品，肉類，油脂類となっている．子どものよい歯質をつくるための栄養摂取とその注意については，食品そのものも大切だが体力をつけることも必要であると考えられているので注意を要する．

4.　子どもの食物に対する好き嫌いについて

好き嫌いの多い子どもにむし歯の保有率が高く56.0%で好き嫌いのない子はむし歯が少かった．好きな食品としては，図2の通りで，肉類と果物が多く，嫌いな食品は野菜であった．しかし肉のかたまりは嫌いで，ハム，ソーセージは好きというように形態，舌ざわりが関係し，

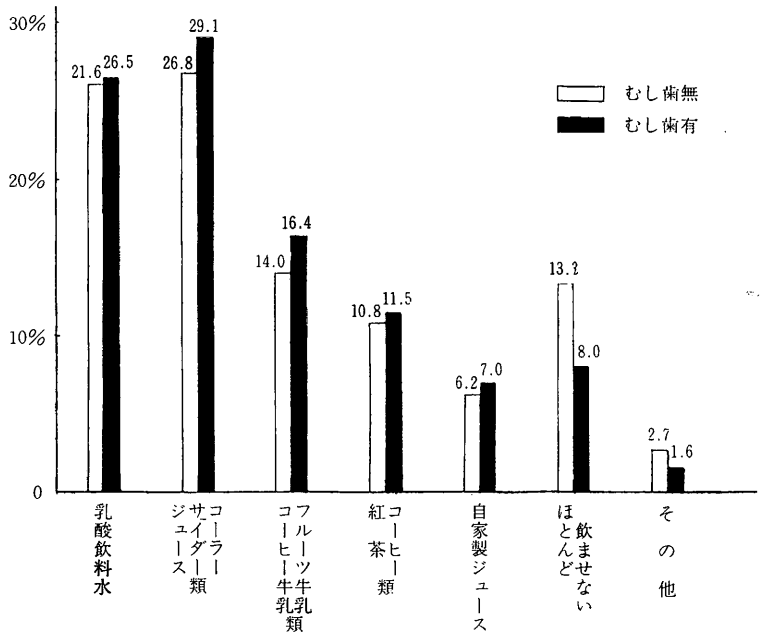

図4　子どものよく飲む飲み物

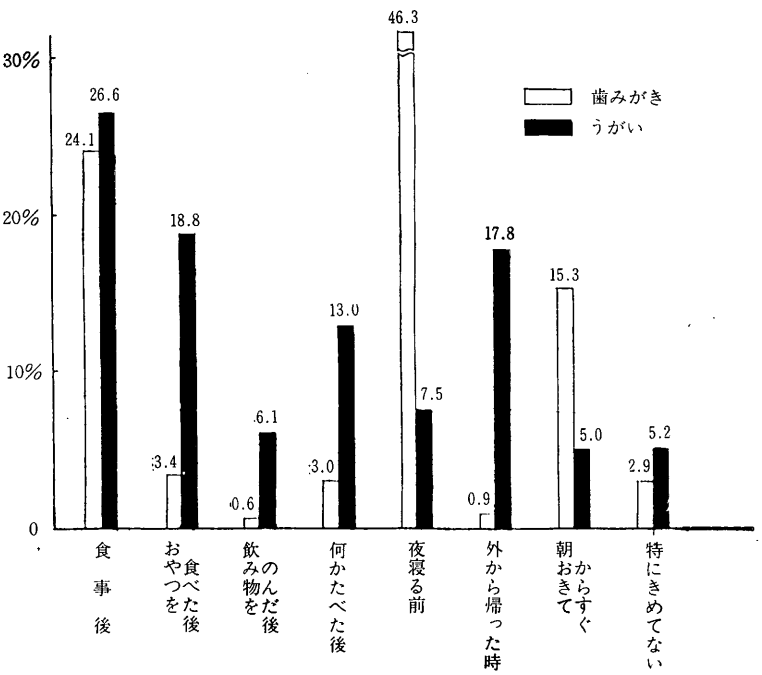

図5　歯みがき・うがいは1日のどの時間帯にするか

匂いの強いものが嫌いというものもみられて，心理的な影響も多分にうかがわれる．

5. **子どもの間食について**

間食については，与え方が規則的であるか，欲しがるときに与えているかの調査によると，1日のうちほぼ時間をきめて与えているものが38.0%で，きわめていないものが24.3%であり，むし歯の有るものは，欲しがるとき与えるとか，不規則に与えているものが多かった．おやつをだらだらと頻回にとるものは，それだけ糖分の摂取が多くなってくるわけで，むし歯のできやすい傾向がみられる．間食の種類については，図3の通りである．

子どもの好むアイスクリームがむし歯の有無にその差がはっきりあらわれ．歯に附着しやすく，粘着性の高いおやつがむし歯の発生を高めるといわれるが，クッキー，ガムを好む子どもに，むし歯のある子が多くその傾向がみとめられる．

6. **子どもの好む飲料について**

乳酸・炭酸飲料，人工果汁などの飲料が好まれているが，これらを多くとるものにむし歯が多いのは当然である．図4の通りであった．

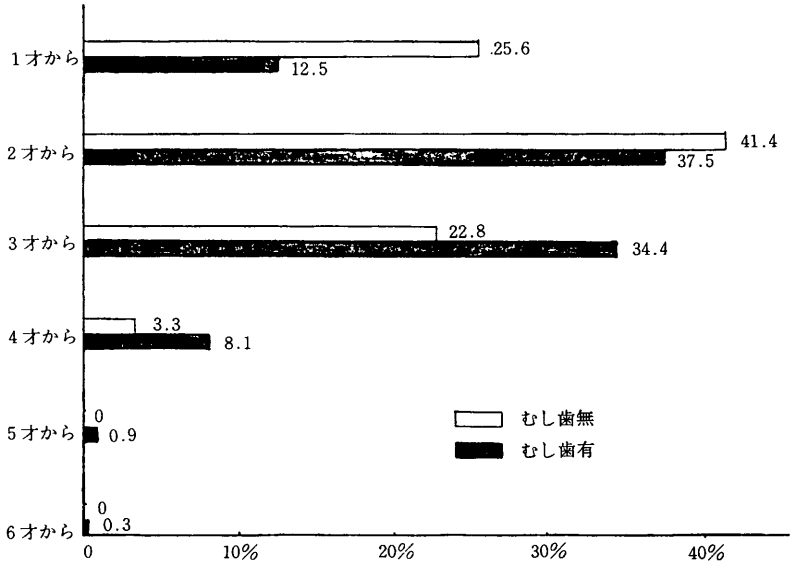

図6　歯みがきを何歳から実行したか

表2　むし歯から守るために特に注意したこと

予　防　対　策	むし歯，無	むし歯，有	無　回　答
1. 食物の選択	23.3%	17.0%	16.9%
2. 栄養面の注意	14.0	12.6	12.8
3. 食後の口腔清掃の実行	27.2	28.5	25.8
4. 間食の与え方	22.4	19.9	17.9
5. 規則正しい生活	2.1	2.0	3.8
6. 歯の検診	6.2	12.1	8.1
7. 特に注意していない	3.2	6.4	9.7
8. そ の 他	1.1	0.5	0.5
9. 無 回 答	0.5	1.0	3.4

7. **歯の清掃について**

口腔清掃は幼稚園・保育所でよく指導しており，保健所でも1歳6か月検診で歯みがきをすすめるので，大体1歳～1：6歳で実行していた．

1日の時間帯でいつしているかは図5の通りで，朝・夜は歯ブラシで清掃し，食後や外出から帰ったときは，うがいが多くみられた．むし歯のある子どもは歯みがきを実行するものが少く，歯みがきの開始の時期も遅い．子どものむし歯が発生するのは殆んどが萠出直後であって，萠出後のある期間までにむし歯が発生しない場合は，その後はほとんどむし歯にならないことと考えあわせて，歯みがき・うがい等の清掃の実施の時期は大切である．図6では何歳から実行しているかの調査結果であるが，これにもはっきりと早期開始の方が望ましいことがうかがえる．

8. **むし歯予防の対策について**

保護者がむし歯の予防対策としてどんなことに注意をしているかは，表2の通りである．

食後の口腔清掃の実行・間食・食物の選択や与え方が多く，注意されている．

6. **その他**

保護者のむし歯の有無をしらべると，両親にむし歯の多い場合は子どもにも多く，歯みがきの励行も両親を見習っているのが分る．歯の検診をよくする保護者，乳歯を永久歯以上に考えている保護者の子どもはむし歯が少く，起床・睡眠時間，テレビの視聴時間，戸外遊びの内容や時間にもよく注意して，規則正しい生活を心掛けている場合が多く，はっきりと調査にあらわれていた．

また，指しやゃぶり，爪かみの有無とむし歯との関係についての調査では顕著な差はみられなかった．

哺乳壜むし歯がさかんに問題にされているが，哺乳壜を使用していた時期と使用方法についても，比較してみたが，保健所の1歳6か月検診がよくゆきわたっているせいか大体がこの時期にやめている．

1：6歳までにやめたもののむし歯罹患児率は73.6%，1：7～3歳まで使用したものでは83.6%であった．これが直接哺乳壜むし歯に連らなるとはきめ難いが，10%のひらきは指導の上で考えられねばならない．

また，歯ならびの良し悪しについては，あまりむし歯に直接関連はなかった．歯科検診，フッ素塗布等の実態も調査したが，生活態度の参考にはなったが，むし歯との関連はみられなかった．

その他，祖父母との同居，家族の歯に関する意識なども参考にしてみた．

要　　約

以上の調査結果から，幼児のむし歯について，もっとも関連のあることは，母親のむし歯予防に対する認識の有無で，すなわち妊娠中の栄養の摂り方，乳歯の萠出とともに，口腔内清掃の注意，その後の間食の種類と与え方の問題，乳幼児の健康に関する日常生活面の諸注意などにより，むし歯の有無が生じてくるといえる．地域では東京都内よりも埼玉県の方がむし歯が多く，幼稚園よりも保育所の方がむし歯が少いという結果から，これは，母親の育児態度や子どもの周辺の環境によってむし歯の発生状況に差が生じると考えられる．

乳幼児期はむし歯になりやすく，また予防の効果もあらわれやすいので，保育者は日常の保育活動の中で適切な指導をすすめてゆくことが望ましい．

文　　献

1) 内外消費者問題研究所編著：「むし歯予防」に関する意識調査報告書，内外消費者問題研究所発行，1977年

2) 丸森賢二他編著：むし歯予防の実践，医歯葉出版株式会社，1976年